

# 藤原宮大極殿院の調査

## —第190次

### 1 調査の経緯と目的

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約160mの区画である。その中央には、即位や元日朝賀などの儀式の際に天皇が出御する大極殿が位置している。

**調査の経緯** 大極殿院における発掘調査は、戦前におこなわれた日本古文化研究所による調査<sup>1)</sup>を嚆矢とする。大極殿院回廊の調査では、礎石の根石を検出し、単廊形式と推定された。さらに、西面回廊の「第一区殿堂址」を「西殿」、東面回廊の「第二区殿堂址」を「東殿」とみなすとともに、北門と南門の存在を推測した。

1969年以降は、奈良国立文化財研究所が藤原宮の発掘調査を継続的に実施することとなり、大極殿院の調査も進展している。大極殿院回廊では東面回廊（飛鳥藤原第117次『紀要 2003』）、南面回廊（飛鳥藤原第160次『紀要 2010』）で調査がおこなわれ、門については北門（藤原宮第20次『藤原概報 8』）、西門（藤原宮第21次『藤原概報 8』）、東門（飛鳥藤原第117次『紀要 2003』）、南門（飛鳥藤原第148次『紀要 2008』）で調査が実施されてきた。

その結果、日本古文化研究所の見解を一部見直すこととなり、大極殿院回廊は礎石建ち瓦葺きの複廊形式であり、柱間寸法は桁行14尺、梁行10尺となることが判明した。また、「西殿」と「東殿」は門とみるのが妥当であり、大極殿院回廊には桁行7間、梁行2間の門が4つあると考えられるようになった。4つの門の柱間寸法は、南門が桁行と梁行ともに17尺、ほかの3つの門は桁行14尺、梁行11～12尺と推定した（『紀要 2003』）。ここによく、大極殿院は東西対称の形態に復元されるに至ったといえる。さらに近年、大極殿の南面階段を検出し（飛鳥藤原第186次調査『紀要 2016』）、大極殿の測量調査もおこなわれ（『紀要 2016』）、大極殿院の造営計画にまで考察がおよぶようになったことは重要である。

**調査の目的** このように、大極殿院の解明に向けた調査と研究は着実に進展している。しかし、残された課題も少なくない。まず、東門の南端が未確認であること、門と回廊との取付部の構造が不明であることがあげられ

よう。北門と西門については、発掘調査時に示された見解や遺構の解釈を変更した部分もあり（『紀要 2003』）、再調査を踏まえた再検証も考慮すべきである。また、北面回廊および東面北回廊については未調査の箇所が多く、大極殿院回廊を復元する上で、発掘調査の必要性が高いところである。

こうした経緯を踏まえ、今回の調査では、東門の南端を確認して東門の規模を確定すること、東門と東面南回廊との取付部の構造を把握することを目的とし、調査を計画した。調査地は、飛鳥藤原第117次調査の北区と南区の間に位置する。調査区は既調査区と一部重複させて、南北32m、東西15mの480㎡の範囲とした。調査期間は、2016年10月4日から2017年2月6日までである。

**地形と基本層序** 藤原宮は、南東から北西にむかって低くなる緩斜面に位置する。1990年代初めには大極殿と周辺は仮整備され、大極殿院回廊は盛土を施して整備し、凝灰岩縁石と貼芝を用いて幅22mで表示する。

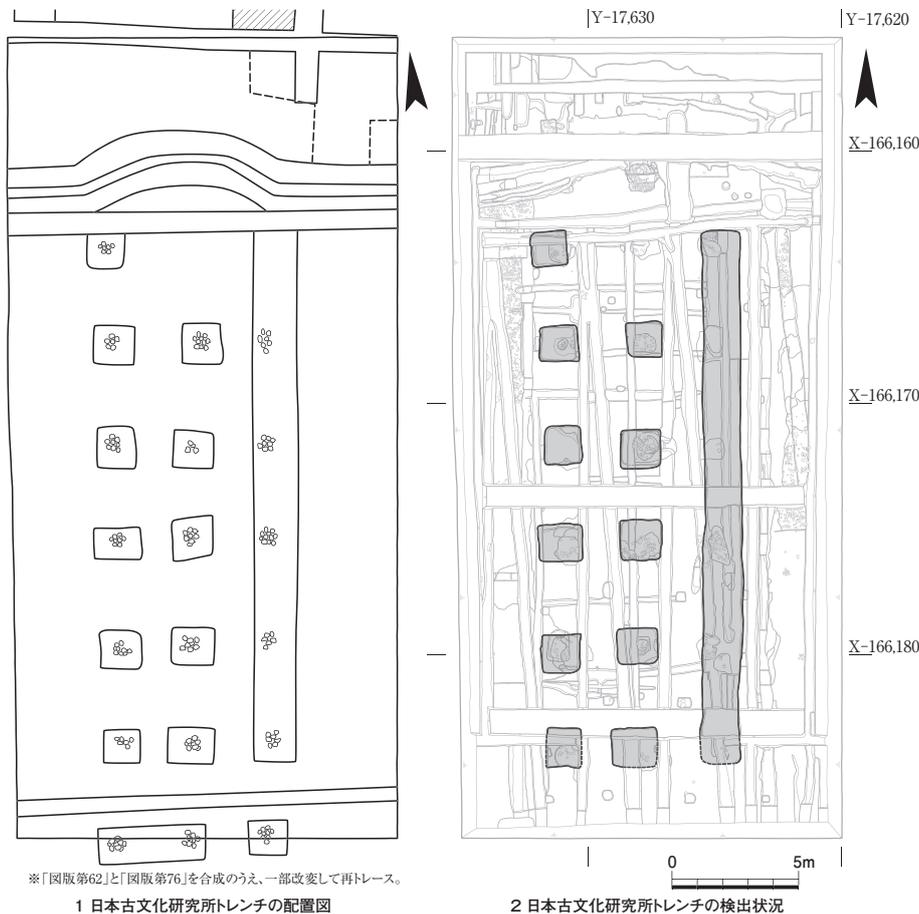
今回の調査では、現地表下に厚さ50～70cmの整備盛土を確認した。その直下に厚さ40cm程度の耕作土・床土があり、さらにその下層に灰褐色土と瓦を多く含む包含層がつづく。この下が遺構検出面であり、現地表下約1.2m、標高71.0m前後となる。遺構検出面の土層は地点によって異なり、回廊上では暗褐色砂質土、内庭側では礫敷ないし黄色砂質土、外側では灰色砂質土や黄褐色粘質土・暗褐色砂質土となる。

### 2 検出遺構

#### 日本古文化研究所トレンチ

今回の調査区の場合は、1939年度に「第六区」の「東面廻廊址」として、日本古文化研究所によって調査がおこなわれた。報告書には、まず「溝掘り」を手掛かりに柱の位置を推定し、それをもとにさらなる調査を進めていった経緯が記されている。

今回の調査では、標高71.4m付近の床土上面で検出をおこなった（図107-2）。まず、回廊の柱位置のうち、東側柱列にあたる場所では幅1.5mの布掘り状のトレンチを確認できた。このトレンチの北端は門と回廊との取付部までは延びない。また、棟通りと西側柱列にあたる場所では、11ヵ所で一辺1.5mの壺掘り状のトレンチを確認できた。これらのトレンチは取付部では認められず、



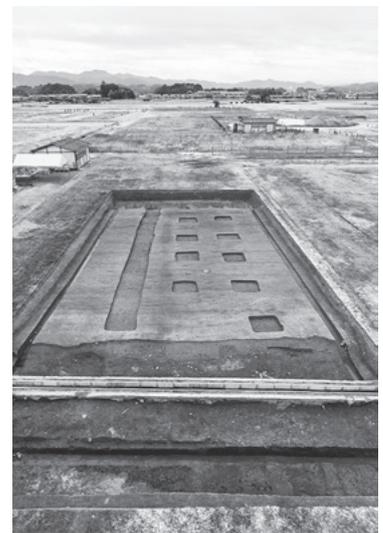
※「図版第62」と「図版第76」を合成のうえ、一部改変して再トレース。

1 日本古文化研究所トレンチの配置図

2 日本古文化研究所トレンチの検出状況



3 日本古文化研究所トレンチの検出状況(東から)



4 日本古文化研究所トレンチの検出状況(北から)

図107 日本古文化研究所トレンチ配置図と検出状況 1 : 300

取付部に隣接する棟通り柱筋の1ヵ所でも確認できなかった。

こうした検出状況は、日本古文化研究所トレンチの配置(図107-1)と合致する。この図では、東門と東面南回廊との取付部にあたる場所に、東西方向の水路と里道が描かれている。この水路と里道の存在が、日本古文化研究所がここにトレンチを設けなかった理由であろう。なお、このことは、後に述べる調査区北端で検出した3基の遺構が、日本古文化研究所のトレンチではないことを意味し、東門南端の礎石据付穴とみる妥当性を傍証するものとなる。

なお、調査区北端(X-166.160)で、東西方向のコンクリート製水路とU字溝が調査区を横断する。門と回廊の取付部にあたる重要な箇所ではあるが、この水路を設営した際の掘削が遺構面よりも深い状況にあった。そのため、遺構は残存していないと判断し、コンクリート製水路を撤去しての調査はおこなわないこととした。

### 藤原宮期の遺構

東門、東面南回廊にかかる一連の遺構、回廊造営時の南北溝、内庭の礫敷広場などを検出した(図108)。

**東門SB9500** 調査区の北端で3基の礎石据付穴を新たに検出した。礎石は抜き取られ、据付穴が深さ約10cm分残る。据付穴の埋土は、黄褐色砂である。大きく削平されているものの、一辺1m程度の方形になると思われる。礎石据付穴の遺存状況は悪いため計測が難しいが、柱間の間隔は梁行11尺とみなせる。

後述するように、南接する2間分(取付部)の柱間寸法(桁行)が回廊の桁行14尺よりも狭くなる点、梁行が回廊よりも広く11尺等間となる点をもって、この3基の礎石据付穴を第117次調査北区からつづく東門SB9500の南端とみなすことができる。標高70.80~70.95mで検出した。礎石据付穴の底の標高は、両側柱で70.80m、棟通り柱の一番低いところで70.60m。なお、東門の基壇外装と雨落溝は削平されており、確認できなかった。

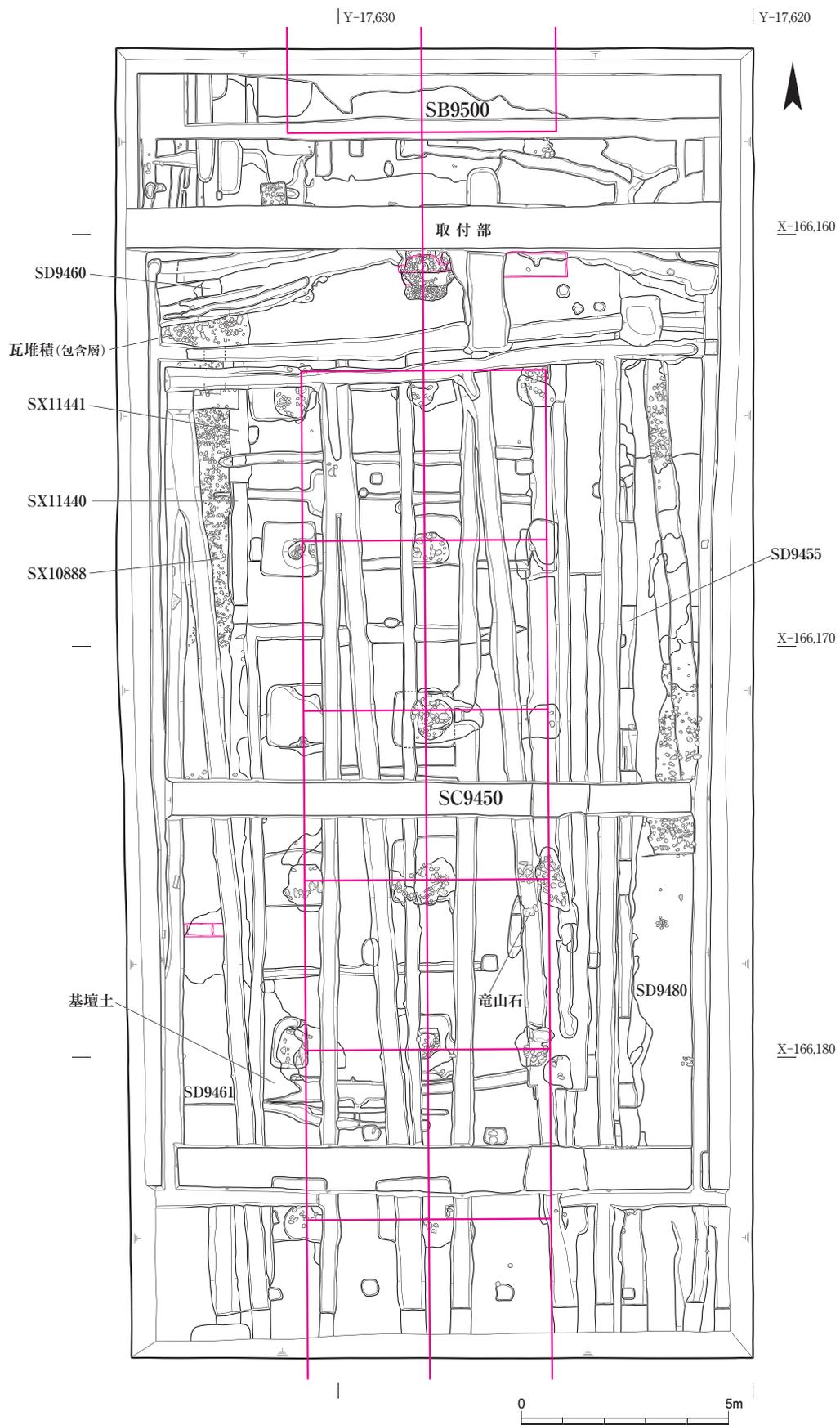


图108 第190次調査区遺構図 1 : 150

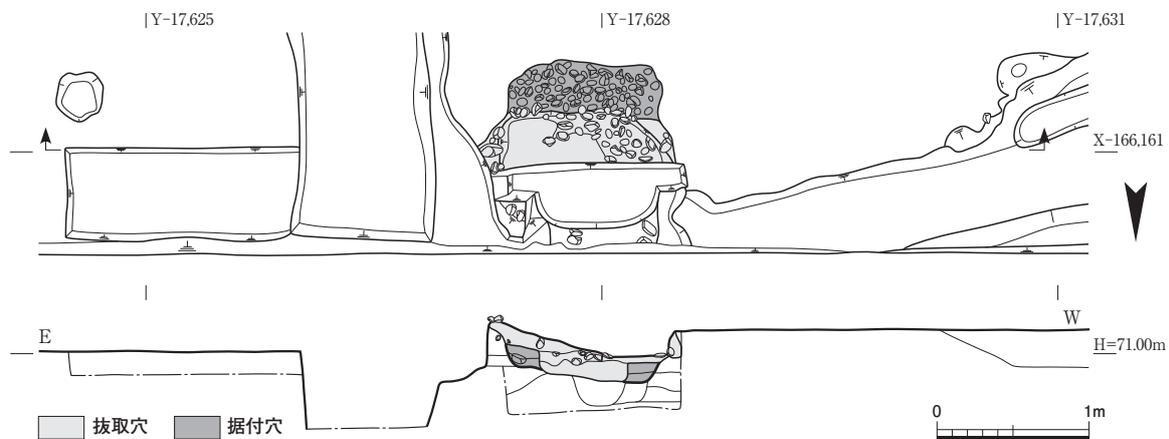


図109 取付部の遺構図・断面図 1:50

**東面南回廊SC9450** 第117次調査南区につづき、礎石据付穴および抜取穴を検出した。礎石はすべて抜き取られており、2基（東側柱列の南から2基目、棟通り柱筋の南から4基目）にのみ礎石の破片を認めるにとどまる。礎石据付穴の底に根石を残すものは多いが、据付穴は深さ約10cmしか残っておらず、削平の度合いが大きいようである。柱間寸法は、桁行14尺、梁行10尺となり、従来の調査成果と合致する。なお、礎石据付穴あるいは根石は標高71.10m付近で検出し、据付穴の底は70.95m付近。

東門SB9500との取付部は南北約6mとなり、回廊の桁行の柱間寸法とは異なる。この取付部で小礫を充填する土坑を1基検出した(図109)。一辺約1mの方形をなし、深さ40cmが残る。回廊の棟通り筋上に位置する点、重複するように抜取穴がみられる点を考慮すれば、この土坑は東門SB9500と東面南回廊SC9450との取付部にあたる礎石据付穴と認識できる。礎石据付穴の埋土に小礫を詰めたものと理解できるのである。ただし、その東西では両側柱にあたる礎石据付穴・抜取穴は検出できなかった。遺構検出面の標高をみると、大きく削平されていないと思われるので、取付部の柱は棟通り筋の1基のみであった可能性が高い。取付部の礎石据付穴は標高71.20mで検出し、底の標高は70.80mである。取付部の柱間寸法は、棟通り筋で約3.5mと約2.5mとなる。

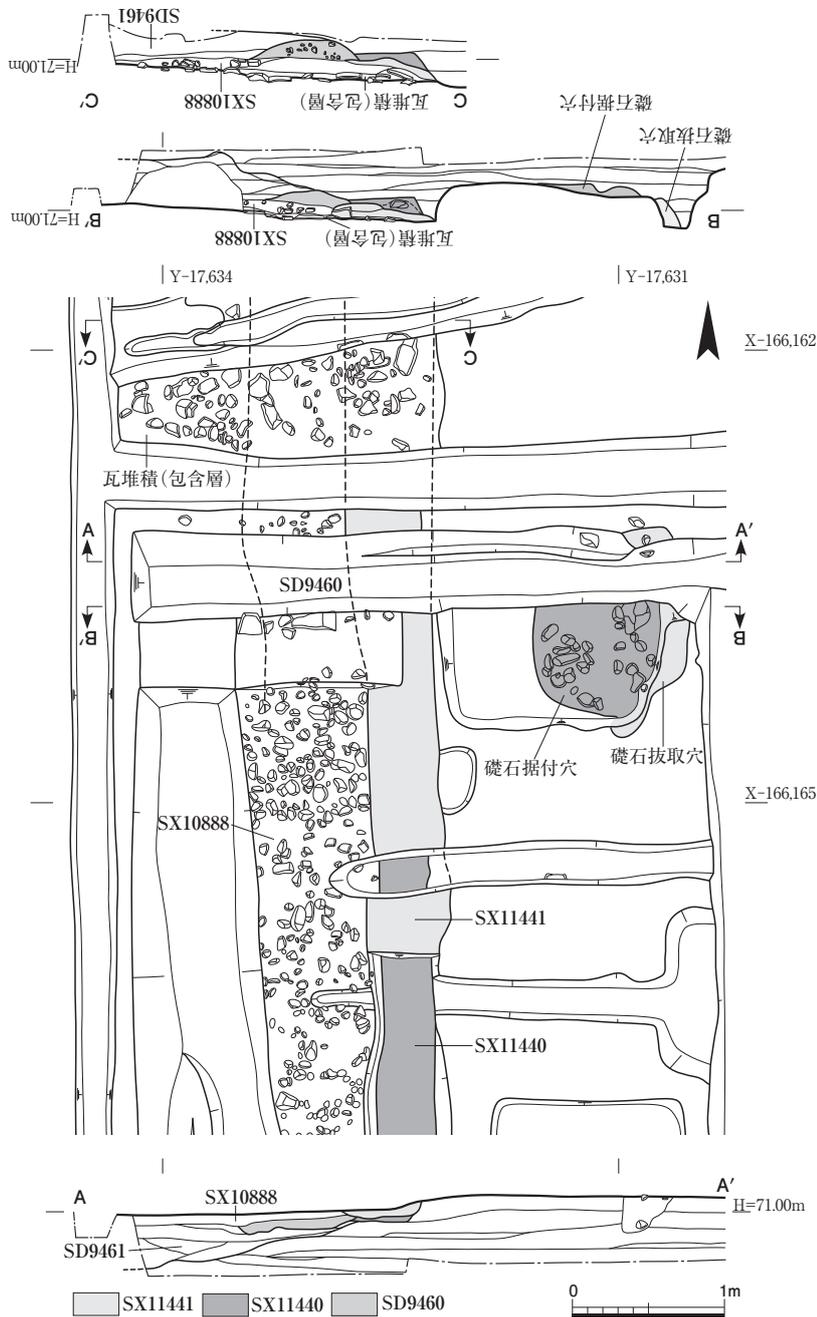
なお、礎石据付穴の周辺で、一辺40cm程度の小穴を10基余り検出した。回廊の造営時あるいは解体時の足場穴と考えられる。ただし、抜取穴は認められない。また、東面南回廊SC9450の基壇土は削平されており、ほとんど遺存していないが、西側柱列の南から2間目周辺でわずかに認められる（橙色粘質土混じりの黄色粘質土）。

**東面南回廊東雨落溝SD9455・西雨落溝SD9460** 東雨落溝SD9455は、東側柱筋の東1.9mの位置で検出した。灰色砂を埋土とする素掘溝で、幅45cm、深さ10cmが残る。西雨落溝SD9460は、西側柱筋の西1.9mの場所で検出。幅60cm程度、深さ10cm。西雨落溝SD9460は南北溝SD9461を埋めた後に掘削され、その後、礫敷広場SX10888に覆われる状況が判明した(図110)。また、基壇外装据付溝SX11440と重複関係にあり、西雨落溝SD9460が新しい。東西雨落溝の心々距離は約9.9m。なお、東雨落溝SD9455は第160次調査の溝状遺構SD10893、西雨落溝SD9460は同じく溝状遺構SD10892に相当する。

**東面南回廊西基壇外装SX11440・SX11441** 基壇外装の凝灰岩は抜き取られていたが、黄色砂質土を埋土とする据付溝SX11440を検出した(図110)。幅35cm、深さ5cm。また、据付溝と重複するかたちで、灰色粘質土を埋土とする抜取溝SX11441を確認した。幅60cm、深さ5cm。わずかながら凝灰岩の破片を含む。抜取溝SX11441は、第160次調査の南北溝SD10902に対応すると思われる。

なお、東側の基壇外装は、据付溝・抜取溝ともに認められなかった。既往の調査成果では、回廊外側の基壇外装は花崗岩と考えられている(『紀要2003』)。今回の調査でも、回廊外側では人頭大の花崗岩礫がみられた。

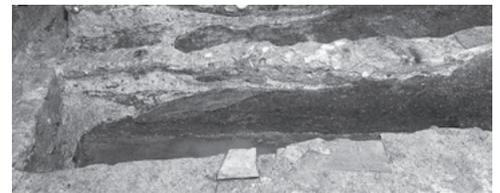
**南北溝SD9480** 東面南回廊SC9450の東側基壇縁に沿う素掘溝。幅60cm、深さ30cm程度。東雨落溝SD9455と重複し、南北溝SD9480が古い。最下層の一部に流水堆積と思われる砂層があるが、大部分は人為的に埋められている。暗褐色砂質土、黄褐色粘質土、灰色砂質土で交互に埋め、層境には凝灰岩の粉末や白色粘土、瓦片を敷く。



断面C-C' (北から)



断面B-B' (北から)



断面A-A' (南から)



基壇外装据付溝・採取溝と礎石の検出状況 (北から)

図110 回廊内庭側の遺構図・断面図 1:50

**南北溝SD9461** 東面南回廊SC9450の西側基壇縁に沿う素掘溝。幅約1m、深さ40cm。礎敷広場SX10888と西雨落溝SD9460と重複し、南北溝SD9461が古い。人為的に埋められ、黄色砂を主体に灰褐色粘質土や灰白色砂質土が互層状となる。第117次調査北区の南北溝SD9485と一連のものと思われる。

**礎敷広場SX10888** 東面南回廊SC9450の内庭側で確認した、大極殿院内庭の広場。直径10cm程度の礎を敷き詰

める。標高71.1m付近で検出。

(和田一之輔)

### 3 出土遺物

多量の瓦類、少量の土器類のほかに、わずかに木器、鉄滓、サヌカイト剥片、凝灰岩などが出土した。

**瓦磚類** 出土した瓦磚類は表18のとおり。軒丸瓦では6273B、6275A・D、6281A (図111-3) が、軒平瓦では6641C・E・F、6643Cが多く出土した。これまで大極殿

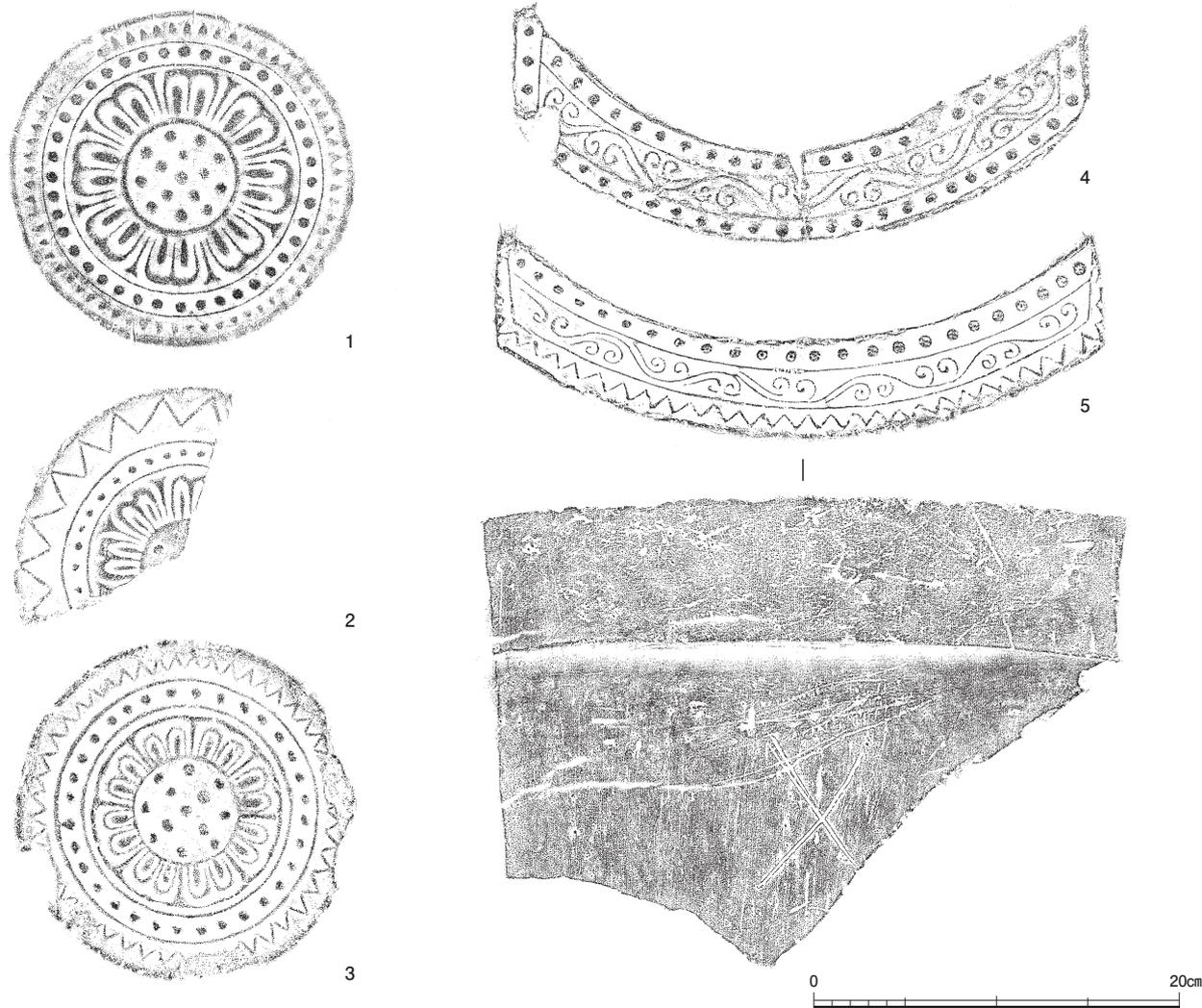


図111 第190次調査出土軒瓦 1:4

院における所用軒瓦の組み合わせは、大極殿で6273B-6641E、大極殿院南門で6275A-6643C、大極殿院回廊で6273A・B-6641E<sup>2)</sup>とされており、今回の調査でもこれらの軒瓦が出土している。いっぽう、今回の調査でまとまって出土した6275Dは、6642A・Cと組んで朝堂院回廊東南隅所用とされてきた。しかし今回の調査では、これらのうち6642Aが1点出土したのみであり、6275Dに対する組み合わせとしてのバランスを欠く。

藤原宮における6275Dの出土傾向は、朝堂院回廊東南隅(第128次)で10点、これに隣接する朝堂院東第六堂(第136次)で10点と、従来の指摘のとおり朝堂院回廊東南隅付近で一定のまとまりをみせるが、このほかに大極殿院東門・東面回廊(第117次)で12点、大極殿院回廊東南隅(第160次)で9点、今回の大極殿院東門・東面南回廊(第190次)で13点と、大極殿院東面回廊付近でもまとまって出土する(同2)。一方で大極殿院東面回廊付近における6642A・Cの出土は、これに見合うほど多くない。したがって大極殿院東面回廊では6275Dと6642A・Cが組んで使用されていない可能性がある。

6273Bのうち、判別できるものはいずれもIグループである(同1)。大極殿院回廊出土の6273BにはIグループが多いことはすでに指摘されており、今回も同じ傾向である(『紀要2010』)。6281Aはいずれも範傷2~3段階、6275Aは砂粒が多いNグループを含まない。6643Cは顎部の段差が低く平瓦が薄いIIグループ(同4)。6641Eは範傷段階が判明するものは少ないが、いずれも2段階のIグループで、1点は平瓦部凹面中央付近に分割界点がある。6641Cは胎土に砂粒を多く含む。6641Fは平瓦が分厚い一群を含まない。脇区部分が判別できる7点中6点は脇区を残すが、1点のみ脇区を半分程度切り落とし、凸面の瓦当付近に「×」のヘラ描きがある(同5)。そのほかのヘラ描きは「一」「十」「×」があり、平瓦凹面が多いものの、丸・平瓦の凹・凸面に刻むものもある。平瓦凹面に「キ」を刻む1点は、瓦当部を欠くが軒平瓦の平瓦部の可能性が高い。

(清野孝之)

**凝灰岩** 耕作溝の底から竜山石(流紋岩質溶結凝灰岩)の破片が1点出土(図112)。上面と長側面は欠損しているが、小口一面を残す。また、底面には粗い加工痕がみ

表18 第190次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6273	B	9	6641	A	1	面戸瓦	46
6273	?	28	6641	C	13	丸瓦 (ヘラ描)	7
6275	A	4	6641	E	13	平瓦 (ヘラ描)	29
6275	D	13	6641	F	16		
6275	?	4	6641	?	6	中近世軒平瓦	2
6281	A	9	6642	A	1	榛原石	3
不明		19	6643	C	7		
			6643	?	1		
			不明		39		
合計		86	合計		97		
			<b>丸瓦</b>			<b>平瓦</b>	
重量	432.31kg				1,453.69kg		
点数	4,495点				28,255点		

られる。残存長28cm、残存幅21cm、最大厚22cm。

#### 4 成果と課題

**東門の規模と位置** 東門SB9500の南端を確定したことで、第117次調査の成果を加味すれば、東門SB9500は桁行7間(14尺等間)、梁行2間(11尺等間)となる。ただし、東門SB9500の遺構は、礎石据付穴や雨落溝をはじめ、いずれも残存状況は芳しくない(図113-2・3)。西門SB2200とともに、桁行7間とする復元案が示されているが、大極殿との位置関係も含めて、なお検討の余地を残す。

**門と回廊の取付部** 東門SB9500の南側の取付部は南北約6mの間隔があり、そこでは棟通りのみ柱が配置されていた。この取付部の礎石据付穴だけに、小礫が充填されていることも大きな特徴である。

他方、西門SB2200では、南側の取付部は未調査である(『概報8』)。しかし、西門「SB2200の南側柱列から10mと14mの位置」で西面南回廊の礎石据付穴(東側柱列)を検出している(図113-1)。この礎石据付穴のもう1間分北側にも回廊の柱があると想定すれば、西門の南側の取付部は南北約6mとなり、東門と同じ構造となる。

**東面南回廊の規模と構造** 東面南回廊では、南面東回廊北側柱と東門南妻柱との心々距離が59.0mを測る。東面南回廊は13間であり、これに東門との取付部として2間が設けられる構造となる。

大極殿院回廊は桁行14尺(4.2m)、梁行10尺(3.0m)の複廊で、基壇幅28尺(8.4m)、基壇高1尺(30cm)と考えられている。基壇外装は、内庭側が凝灰岩、外側が花崗岩とされる<sup>3)</sup>。そして、大極殿院回廊と朝堂院回廊とは



図112 第190次調査出土凝灰岩(亀山石)

同じ規模と構造をなすとみられている。今回の調査でも従来の見解をほぼ追認したが、基壇幅、基壇縁と雨落溝との位置関係については若干異なる結論を得た。

まず、基壇外装据付溝SX11440は、西雨落溝SD9460と接する位置にあり、基壇縁と雨落溝との間に犬走り状の構造を設ける余地はない。基壇外装据付溝が回廊の棟通り筋を中心に東西対称の位置にあるという前提に立てば、基壇外装据付溝間の外寸距離、つまり基壇幅は9.1mと算出できる。軒の出は1.9m。いっぽう、第160次調査では、内庭側と外側の両方で基壇外装抜取溝(SD10902・SD10903)を検出しており、抜取溝の心々距離は9.0m、内寸距離は8.4mである。内寸の距離を基壇幅とみなしたようであるが、心々距離を基壇幅とすれば、今回の調査成果による基壇幅の数値と近似するものとなる。ただし、第160次調査では基壇外装抜取溝と雨落溝とがやや離れており、基壇と雨落溝との間に幅約40cmの犬走りを想定せざるを得ない。しかし、この点の検証は、今後の調査の進展に委ねたい。

**今後の課題** 大極殿院および回廊では、東門北側の取付部の構造、東面北回廊や北面回廊の様相をあきらかにすることが喫緊の課題である。それらを踏まえて、より具体的に藤原宮大極殿院の構造を復元することが求めら

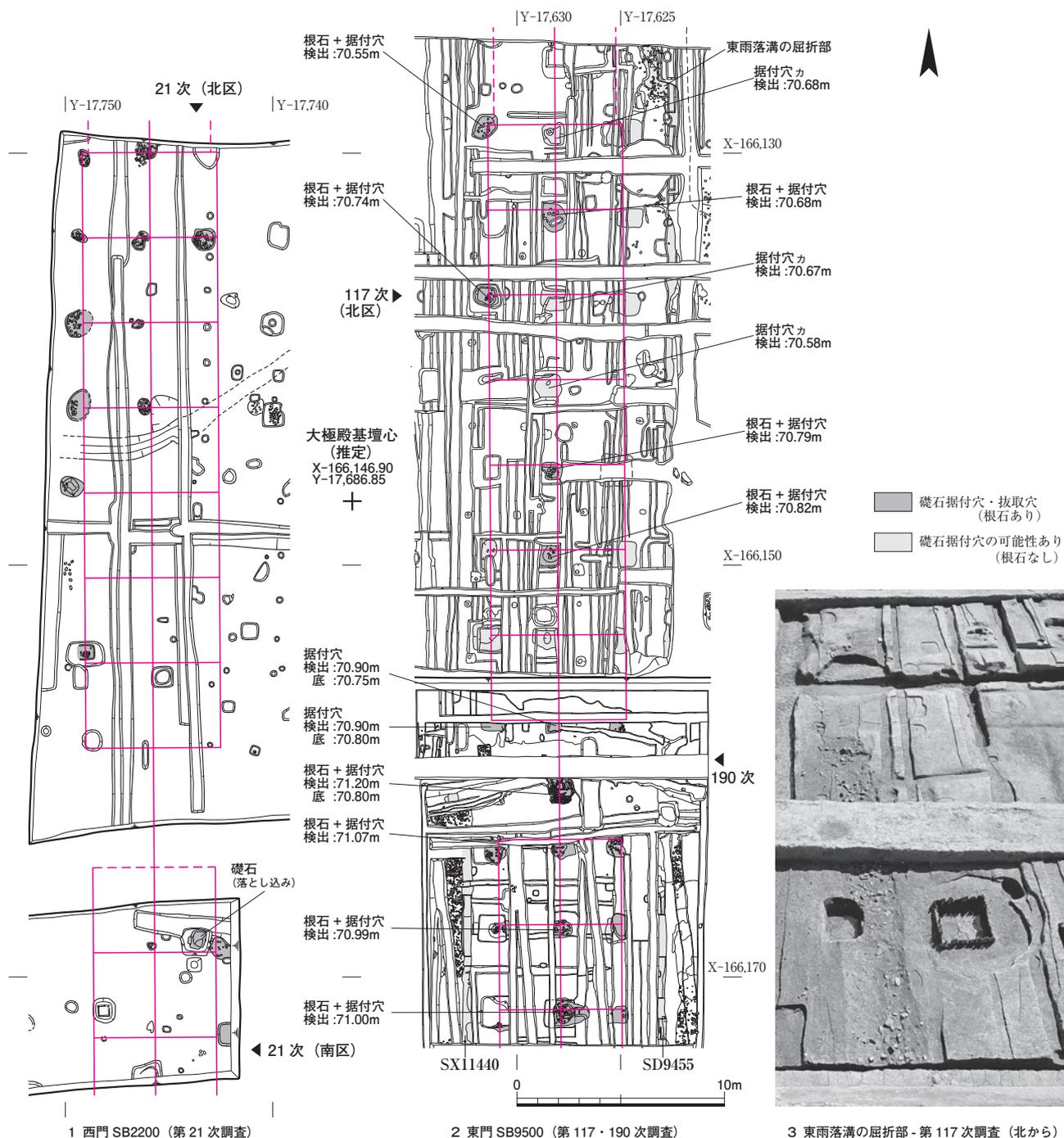


図113 大極殿院東門と西門の遺構図 1 : 300

れていよう。そのためには、当該地区において、さらなる発掘調査が必要不可欠である。

また、本報告で、東面南回廊の規模と構造を再検討したところ、従来の調査成果とは齟齬をきたす箇所も生じた。さらに、今回の調査で確認できた取付部の構造に関しては、藤原宮のみならず、ほかの宮都の事例と比較検討する必要がある。

今後の調査研究の進展に期したい。

(和田)

註

- 1) 足立康・岸熊吉『藤原宮址伝説地高殿の調査一・二』日本古文化研究所、1936・1941。以下、日本古文化研究所の調査成果に関わる引用は、同文献による。
- 2) 石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究』V、2010。
- 3) 『紀要 2010』90頁、『紀要 2003』79頁を参照。なお、東面南回廊で確認できた礎石頂部の標高は71.45m (第117次南区)、南面東回廊では71.48m (第160次)である。